

第2回秋田市総合計画・地方創生懇話会
地域資源活用・魅力向上分科会 会議録

日 時 平成27年9月1日（火）午後3時10分～午後4時10分

会 場 秋田キャッスルホテル

出席者

地域資源活用・魅力向上分科会委員（6名中4名出席）

佐藤裕之委員、小国輝也委員、小杉栄次郎委員、小野泰太郎委員

市側

企画財政部次長、人口減少対策担当課長

議事(1) 意見交換

分科会長 この地域資源活用・魅力向上分科会では、芸術・文化・スポーツ・観光による魅力向上と、豊かな自然を活かした環境立市の確立といった戦略2と戦略3に関連する内容を議論する。

産業・雇用と子育て・健康長寿と他の分科会と重なる部分もあると思うが、あまり限定せずに発言してほしい。

意見交換に入る前に、戦略2と3のポイントについて、事務局から説明をお願いします。

事務局 （成長戦略（資料2）のポイント等を説明）

分科会長 それでは自由に意見をいただきたい。戦略2のキーワードとしては観光や、まちの有り様としての芸術文化、そして観光的に人を呼び込むためのツールとしての芸術文化の使い方など。

戦略3についても環境は住民の視点と観光あるいは産業的な視点と両方あるかと思う。そういった複眼的な見方で議論をいただきたい。

委員 県の総合政策審議会の観光・交通部会でも議論されたが、地域の魅力を複合的にリンクさせて発信することで、県外からの交流人口を増やすことに繋がるのではないか。

秋田市の観光には何があるかとよく言われるが、秋田駅や秋田空港があり、県外から来る方の交通の起点であることは間違いがない。

秋田市に滞留してもらえる時間を増やすことで、県外から来た方の消費が秋田市において活発になる。つまり外貨獲得につながっていく。

そのため、観光のコンテンツとなる文化やスポーツといった部分を強化し、リンクすることが大事である。

先日、県外から来た方に市内を案内したが、和菓子作りや竿灯体験、千秋公園の散策などに非常に満足していた。

秋田には資源がないとよく言われるが、見せ方によっては県外の方が感動するようなコンテンツがある。それをいかに磨き込んでいくかが大事な視点だと思う。

委員 私は3年前に初めて秋田に来た時の印象が、いい意味で観光地化されていないところがおもしろいというものであった。関東にはない自然が、変に観光地化されていない状況で見ることができる。少し秋田市から離れるが、鳥海山や白神山地、また、千秋公園のハスも素晴らしいと思った。

しかし、地元の方にこのような話をすると、「田舎だということですよ」と言っていた。そう感じる方が多いことにショックを受けた。

東京から見るとそれは失われたものであり、そういった価値観の中で大事に育てるという意識を持った方がよい。未だに東京や仙台、盛岡を目指しており、これはまずいと思った。

今日も中心市街地の再開発の話が出ていたが、いいチャンスだと思う。バブル期の頃の夢をもう1回描くのではなく、成熟した、オンリーワンのまちをどう作っていくかを考えないといけない。

また、秋田市はにぎわいの創出と言っているが、にぎわいが本当にそこまで大事なのか。もっと静かに、例えばお金を使わなくてもお年寄りや若い人も町に出られるよう、千秋公園にもう少し日陰ができるものを作ることもよいのではないか。

秋田市の話を知ると管理者目線であって、ユーザー目線ではない。そのため、どこへ行っても面白くないので郊外のショッピングセンターに人が流れる。

まちのしつらえを見ると、例えばベンチ一つとっても、人をとどめるしつらえができていない。ベンチはあっても、少し座りたい、寝そべりたいといった所がない。それは管理者の視点しかないためである。

少し考え方を変えて、今ある資産を10年スパンでもいいので育

てていくことをお願いしたい。また、一緒にやりたい。

昔からの商店、お酒、お菓子など、いいものがあるので、それを大事にしていくと秋田も変わっていくのではないか。もっと自分たちのまちに自信を持ってほしい。

委員 観光の醍醐味は、その地域にしかない文化や歴史、それを育んだ生活に触れることではないか。

まちに行けば住む人の品格がわかると言われるが、例えば京都や金沢のように、まちを散策することで歴史や文化に触れることが大事だと思う。

そのためには秋田市のコンセプトをしっかりと持つ必要がある。例えばコンパクトシティにプラスして、健康的なまちとして、ウェルネスシティ構想といったタイトルを打ち出すなど、高齢化を逆にとってアピールしてはどうか。

今までのコンパクトシティは、都市の効率化、合理性を基に考えたものだが、超高齢化社会における街づくりは、健康に配慮した回遊性を持つ、歩ける街づくりが秋田の観光にもつながると思う。

委員 これから高齢化が進む中で、公共交通機関の重要性が増してくるが、秋田市のバスを見ると料金体系が古いままである。例えばゾーン制にすると、乗り換えが便利になるが、そういった気配がない。長岡市など他都市ではそういったことを進めている。料金体系や路線を少し変えるだけで、バスの利用が増えるのではないかと思う。

そうしなければ郊外のショッピングセンターに勝てない。まちに人が集まって滞留するには、あらゆる手法を使っていかないと難しい。

委員 計画の素案はまだ総論で、主語を変えるとどこでも通用する。これをまず変えなければいけない。

前回の会議でも述べたが、例えば盛岡市とは違うエッジの効いた内容になっているかといった部分の詰めが甘い。

その上で戦略2の芸術文化、スポーツ、観光であるが、順序が逆で、まちづくりはコンテンツが先にあるべきである。景観や建築の分野でも、それを見て、どう判断して、だからこうだというロジックがない建物はどんなに斬新であっても面白くない。

そういった意味では、今はどこでもそうだが、デザインのコンペで外国人や東京など外部に頼ってはいけない。秋田で生まれ育った人間が秋田の建物をデザインすることが人々の心をとらえ

る。

委員 私はむしろ逆で、地元の人参加の方がよいとは思いますが、公平なコンペを全世界に向けて発信するという形にした方がよい。秋田の建築家はそこに挑んでいかないといけないと思う。

分科会長 そうすると地方のまちは金太郎飴になると思なので、エッジを効かせるために、土着性を大事にするべき。

役所も民間も東京のデザイナーなど、よそに頼り過ぎている。外から呼んで来ればよいと思って、自助努力をしていない。そこは反省すべきだと思う。

また、私もまちを歩くことが大事だと思い、「車を捨てよう、まちに出よう」というキャッチフレーズを過去に提案した。住民がそぞろ歩きできるようなまちをつくらないと都市の観光はできない。

もう一つは、秋田の人は新しい物好きであり、特にスクラップ&ビルドが大好きで古い物が残っていない。

例えば川反の松並木などはなくなっている。しかしながら過去の遺産やその形跡は残っており、それをもう一度検証し、資源として活用することも必要。

また、寺町の札所文化など、全国でも珍しいがほとんど忘れられているものを掘り起こし、そのコンテンツを大事にしていくことが、今日本中で観光資源になっている昔のノスタルジアを大事にしたまちづくりのきっかけになる。

委員 主語を変えるとどこでも通用するものだと、全国どこでもある金太郎飴みたいなものになる。なぜそうなるかという、中央のコンサルタントや有名な人を頼っているためである。

これから秋田を再生するためには田舎くささや秋田ならではのものを復活させるべき。

建物も、県民会館ができる前の記念館を写真で見たことがあるが、あのような素晴らしい建物も壊してしまった。今残っている物は赤れんが郷土館くらいしかない。

岩手には昔から残っている土蔵があったり、山形は食べ物があったり、古き良き物は保存し、継承している。それがこれからの時代は文化として価値もあり、まち並みとしても景観のポイントになると思う。

県は「高質な田舎」と言っているが、生活感など田舎くささを出すことが必要だと思う。

分科会長 経済的に考えると今後は大きい建物が建たないかもしれない。そうであれば鉄筋コンクリートでなく、木造でも良いかもしれない。そうなれば自然と街並みが柔らかくなるかもしれない。これは時間がかかるかもしれないが、それが育まれていけば、秋田もいいまちになると思う。

委員 それに賛成だが、古い物が無くなりどうするかといった時に、昔のまち並みを再現するのがいいという訳ではない。どんな物があって、どこを引き継いでいくかをまずピックアップすることが重要。

その先に、古い物を焼き直して作るのではなく、そこに何を作り何をするかを考えていかないといけない。そのためには今までの地形や地割りがどうだったかなどをもう一度見直し、規模なども考えなければならない。

まちづくりは行政任せではなく、自分達でこうしたいというものを作っていくといけない。

分科会長 例えば秋田の蔵には屋根を支える木があり、全国的に珍しい。秋田は雪害があるので屋根を補強するための構造になっているものと思われるが、こういったことを少し意匠的に考えて活用してはどうか。

昔は町内単位で、こういう住まい方が楽だからこういうまちにしよう、自然に民の世界でまちづくりができていたはずである。

ぜひ検討してほしいのは、戦略2で芸術文化・スポーツと言っているが、そのコンテンツとして使えるものは何か。古い物が限られるとすれば、ソフト的なものでまちづくりのコンテンツを作り上げることもよいのではないか。

例えば、秋田県に行くと県民がみんな秋田県民歌を歌えると言うと、他県から来た方はなぜみんな歌えるのかと驚く。歌や絵、ファッションでもいいと思うが、そういったものが呼び水になる。先に住民ありきではあるが、そういったものを個別具体的に計画の中で表現してもよいのではないか。

スポーツについて言えば、例えば秋田に行くとまちなかでリフティングの練習をしているとか、3オン3のようなことを各所でやっているとか、また、健康のために歩いている方も多いのでそれをもっとブームにするなど。そうすると外から人が来る。そういったものを入れていかなければならない。

委員 ノーザンブレッツ、ノーザンハピネッツ、ブラウブリッツとプロスポーツが3つあり、またハピネッツみたいにあれだけブレイ

クして盛り上がっているのは、秋田の人間力ではないか。

スポーツの盛り上がりは人が人を呼ぶ。応援で行ったり来たり、そこで交流が活発になる。

委員 観光の話だが、青森は新幹線の関係で函館と連携して青函経済圏というものを作ろうとしている。観光中心で宮城経済圏より大きい経済圏を作ろうという意気込みである。

函館は外国人観光客が去年は35万人で、今年は50万人、2020年には100万人を目指すという規模である。

それに比べると秋田は外国人観光客が来た場合に受け入れる体制になっているのか。外国人が秋田駅に降りてどこに行ったらいいか、誰に相談したらいいか、そういった受入体制が遅れていると思う。

分科会長 駅では観光案内をしているが、まちなかにも英語のコンシェルジュがいてもいい。県ではそういったことを検討している。

住民による受け入れについても、行政で金を出さなくても、住民が楽しんで取り組めるような仕組みを考えるべき。

また、観光で言うと、戦略1にかかると思うが、例えば秋田八丈や八橋人形など、このままいくと廃れていくものを、東京のデザイナーとタグを組むなどしてブラッシュアップすることも必要。すると工芸として一流品の物がたくさんできる。それをツーリズムにつなげてはどうか。

また、美大生が新屋の空き家でカフェなどを行っているが、町内会単位あるいは商店街単位でもっとできないかと思っている。

大曲の花火の時に民間のホテルが足りない状況であったが、役所の施設が空いていた。そういった時になぜそれを有効活用できないのか。そういった時こそ官民共同の日頃からの会話がなくて物事が進まない。今日のような話し合いの場づくりが必要かもしれない。

戦略3についても意見をいただきたい。まず事務局に訪ねるが、「豊かな自然を活かした環境立市の確立」に関して、里山が今話題となっているが、市が考えている里山とはどの辺か。

事務局 ここが里山だという基準はないと思われるが、上新城のような、深い山と住宅地の間にある所が里地、里山と言われている。人間がある程度整備をしながら、自然と一体となって生活する場というのが一般的にいう里地、里山だと認識しているが、秋田市においてこの地域が里地、里山である、といった見解はない。

- 分科会長 なぜそんなことを言ったかというのと、戦略3に農山村文化と都市の利便性を兼ね備えていると書いているが、モデルとしてどこを想定しているのかというのがわからない。
- 本当に秋田市は農山村文化と都市の利便性を兼ね備えているのか。雄和と河辺を合併したから初めて言えることで。それではまったくコンセプトになってない気がする。
- 委員 秋田市はクリーンエネルギーを進めており、視点としては非常に面白い。そこを強調すると対外的なアピールになると思う。
- しかし、市民と話をしていてもあまり通じない。他でやってないことをやっているとしてPRすることが重要。
- また、成長戦略が総論的な書き方になっており、もっと具体的に示した方がよい。特に戦略2がぼんやりしていて何を書いているかよくわからない。
- 委員 里山研究会というものがあり、ここでは老人クラブや幼稚園など、様々な主体が農村で稼ごうという取組が始まっている。
- 例えば組合を作り、竹林で筍を掘って売ったり、竹炭を作って売るなど、様々なことを考えている。
- 農村は特に人口が減って大変だが、自分達で自立していくという意識が農村を豊かにしていくと思う。そうしないとどんどん人口が減っていく。
- 自分達の生活に密着したものをベースにして稼ぐことが生きがいにもつながる。
- 分科会長 そういう意味では、私は環境ビジネスの当事者であり、風力発電に関して、県は積極的に意見を持ってくるが、秋田市は接触してこない。
- エネルギーに関しては、秋田市は太陽光や風力のほか、バイオマスもでてくるので、自然エネルギーの生産地になる。それに名乗りを上げない手はない。エネルギーの地産地消宣言をするなど、そのくらいあってもいいのではないかと思う。
- 委員 スマートウェルネスシティ構想というのはどうか。
- 秋田県は電気が余っている。秋田県民は能代火力発電所の発電機1機プラスアルファで電気が賄え、あとは全部外に出ている。
- 委員 風力や太陽光など色々出てきて、それも全部売れるので、地産地消プラス生産地として県外に売っていける。

分科会長 日本ならではの風車と松林と砂浜の新しい景観は秋田が日本の典型例になる。それを秋田市が次の段階まで練っていくと、地方創生モデルとして注目されると思う。

委員 秋田市はそういったことをアピールしていると思うが非常に弱いので、もっと強くアピールすべき。

委員 豊かな自然を活かすのも大事だが、自然エネルギーなどでお金を稼ぐという視点も必要である。自然を維持するためにはお金も必要だし、その視点がないと人がどんどん出て行ってしまう。

分科会長 また、電力自由化になると秋田市民は他より電気が安くなる可能性もある。

委員 そうなると秋田市への移住のきっかけにもなる。

委員 そこに里山的な生活が乗ってくると先進的なイメージが持てる。

分科会長 最近、半農半Xという言い方があるが、ヨーロッパでは、自分の畑の真ん中に一本だけ風車を立てて、風のない日は農作業、風のある日はモニターを見るといったライフスタイルが流行っており、憧れる人が多い。日本の中でそれができるのは秋田である。

委員 自然エネルギーを使い、まち並みは木でつくってはどうか。それでも実は両方最先端の技術を使わなければいけないので、そういう意味でノスタルジーなものではなく、最先端のことをやっている意識で。

委員 農村も、例えば鶴岡市にある里山研究会のように組織化するなど、地域の人に稼ぐ意識を持たせるということが大事である。

以上